

聖書：ピリピ 2：12～13

説教題：救いの達成

日時：2017年1月8日（朝拝）

ピリピ書の中には有名で、私たちの信仰生活に大きな力と励ましを与える御言葉がいくつもありますが、今日の御言葉もその一つであると思います。パウロは「そういうわけですから」と今日の箇所を始めます。これまでは1章27節の「ただ一つ。キリストの福音にふさわしく生活しなさい。」（欄外27別訳「御国の民の生活をしてください」）というメッセージを基調として、互いに一致の内に歩むべきことが勧められました。そして自分のことだけではなく他の人のことも顧みる模範として、キリストのへりくだりと神への服従の姿について語られました。これらのことを受けてパウロはピリピ人たちに対し、「そういうわけですから」あなたがたは自分の救いの達成に努めるように！と今日の箇所です。ここで言う「救い」とは救いの最終状態のことです。私たちはイエス・キリストを信じ、「私は救われた」とか「救いを頂いた」と表現をすることがあり、それは間違っていないが、だからと言って救いの最終状態に達したわけではありません。信仰を持ってもまだまだ踏み進むべき、神が備えた信仰のコースがあります。神学的な用語で言えば「聖化」の道程です。イエス・キリストを信じ、神の前に義と見なされる信仰義認ですべては終わりなのではなく、キリストに似た者となることに向かって日々造り変えられる聖化の歩みが残されています。その道を前進して救いの達成に努めよ！とパウロは言っているわけです。今の状態で止まってしまってはならない。そのための道筋として言われたことが、互いに一致する生活であり、そのためのへりくだる生活です。その歩みを経て、その人は神の定めの際に高くされるという祝福を受けることができるのです。

この課題に取り組むための力強い励ましが13節に語られています。13節：「神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださるのです。」原文ではこの節の最初に「というのは～だからです」という言葉が入っています。ですからこの節で語られている真理を良くわきまえ知り、受け止めることが、12節の命令を私たちが実行するために非常に大切であるということです。この13節に語られていることは何でしょうか。それは一言で言えば「神があなたがたの内に働いている」ということです。これが聖化の歩みの基礎であり、また励ましとなることなのです。

まず考えたいことは 12 節で「自分の救いの達成に努めよ」と言われましたが、この救いは神から出ているということです。1 章 6 節：「あなたがたのうちに良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださることを私は堅く信じているのです。」 エペソ書 2 章 1 節に「あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって」とあります。すなわち私たちは以前は霊的に死んでいた者たちでした。死んでいる人は自分から何かをすることはできません。ですから私たちが自分の救いのために貢献できたことは何一つありませんでした。私たちの救いはただ神から始まりました。「あなたがたのうちに良い働きを始められた方」、すなわち神が私たちのうちに救いのみわざを始めてくださったのです。

しかし今日の 13 節から学ぶ二つ目のことは、神は私たちが信仰を持った後も継続して働いておられるということです。時々、キリストへの信仰を持った最初の出来事、すなわち信仰義認の出来事はただ神の一方的な恵みによるが、その後の聖化の歩みはそうではない。それは神と人間の両方の働きによることだと言われるあまり、次第に結局のところ、すべては私たちにかかっているかのように考えられる場合があります。すなわち最初は恵みで始まるが、その後はそうではないかのように。信じた後の聖化の歩みはかなりの部分、私たちの努力で完成させて行かなければならないかのように。しかしこの 13 節には、神が信者の内に引き続き力強く働いておられることが言われています。先ほど見た 1 章 6 節でもそうでした。神は私たちの内に良い働きを始めた方であるばかりでなく、それを完成させて下さる方です。私たちの救いは最初から最後まで神の恵みのみわざであるということです。

ではどうなるのでしょうか。救いが神のわざなら私たちは何もしなくて良いのでしょうか。「神様、どうかあなたの救いのわざを私の内になしてください」と祈って、あとはただ待っていれば良いのか。そうではありません。神の救いのみわざは霊的に死んでいた私たちの人格を生かすものです。ですから死からのちへと移された私たちも活動するのです。ただ受身的でロボットのようなものであるなら、それは真に生かされた人格とは言えません。では神の活動と人の活動はどのような関係にあるのでしょうか。そのことがこの 12~13 節にまとめて述べられています。時々、神の果たす分と人の果たす分がある。神は神の側でなすべきわざを行ない、私たちは私たちの側でなすべきことを行なう。この両者が組み合わされて初めて私たちの救いは完成に達すると言われることがあります。しかしこれは正しい言い方ではありません。パウロはそういう風にはこの 13

節では言っていない。彼はどのように言っているのでしょうか。それは神が働いているから私たちにはそれができるといことです。私たちの救いに関して、神が働いていない部分というものはありません。神がすべての面で働いてくださっているのです、私たちは「するように！」とされていることをすることができるのですし、またそれをしなければならぬ責任があるのです。これはちょっと分かりにくいことであり、確かに神秘的な事柄ではありますが、キリスト教信仰の理解においては非常に重要なことです。

もともと罪の内に死んでいた私たちの内からは良いものは何も出て来ません。良いものが生まれて来るとすれば、それはただ神のお恵みによることです。そのための神の方法は、まず私たちの内に働いて志を立てさせることです。私たちに働きかけて、私たちの意志を恵み深く説得し、私たちが自分自身で神の御心になうことを願い、意志するように導く。初めにイエス・キリストを知り、この方を信じる信仰告白を公にしよう！という思いも、神が私たちの内に働いて起こしてくださった願いです。その後の信仰生活もそうです。私たちが「やはり聖書を日々読まなくては！」と御言葉に向かう時間を持つとする時も、それは確かに私たちが決心してそう行動するのですが、その思いを持つように働きかけてくださったのは神なのです。祈りもそうです。祈りたい、あるいは祈らなくては！と駆り立てられて神の名を呼び始めるのも、神がその意志を私たちに起こしてくださったからです。あるいは他の人を顧みて愛の行ないをしようと思うのもそうです。そのために時間を割いて仕えたり、困窮している人々のために献金をささげることもしょうです。その背後で働いてくださっているのは神なのです。しかし私たちの願うこと全部が神から出ていると私たちが言うことのないように、ここに「みこころのままに」という言葉がつけられています。これは神の良いお考えというニュアンスの言葉です。もし私たちの考えることの全部が神によるとしたらどうなるのでしょうか。そうすると罪の考えも神によるということになってしまいます！自分勝手な考えも、これは神が私に与えたのだ！と都合よく神に責任転嫁することにつながってしまいます。神は決してそんなことはされません。神は御心になうことのために志を私たちの内に立てられます。神が下さる志は神の良い計画と一致するものです。ですから私たちは神が与えてくださる意志と、そうでない意志とを区別して考えなければなりません。

そして神は私たちの内に志を与えるだけでなく、事を行なわせるという仕方で働いてくださいます。単に思いだけを与えて、あとは私たち人間の力で行なうのではありません。与えた志を行なうための力も神が備えてくださいます。

神はこのようにして神秘的な仕方、今日も私たちの内に継続して働いておられます。そして私を必ず救いの最終状態にまで至らせてくださいます。そのように神が地道に、そして着実に働いてくださっていることを思うなら、どうして私たちは 12 節にあるように、恐れおののかずにいられるでしょうか。神がこのように働いてくださっていることを知りながら、それに無頓着でいることは、このことを本当に知った者にとってはあり得ないことでしょう。私たちの救いは神が完成させてくださると言って、自分でそのために何も努力しない人は、この聖書のメッセージを分かっていない人ということになります。それは私に対する神の愛と忍耐と恵みをないがしろにすることです。神はやがての救いの最終状態に向かって私たちの内に志を立てさせ、事を行わせてくださるという仕方、働いてくださっています。ですからそのもとにある私たちには大きな責任があるのです。私たちはそのことに恐れおののきながら自らの救いの達成に努めなければなりません。12 節でパウロが言っているように、パウロがそこにいて見ているからとか、そうでないからといったことは関係ない。神がこんな私を見捨てず、最後まで導いてくださることを確信し、喜びながら、畏れつつ自分の取り組むべきことに向かって行かなければなりません。

そのためには具体的にどうすれば良いのでしょうか。私たちが神の御心を知り、御心にかなう志を持つために必要な第一手段は何と言っても聖書の御言葉でしょう。みことばを読む時に私たちは神の御心をよく知ることができます。そしてその御言葉を読む中で、神は私たちに御心に沿った志を与えるという仕方、働かれるでしょう。パウロはこの文脈では先に触れたように、私たちが謙遜になり、他の人のことも顧みて一致の内に歩むように！と語っています。そしてキリストの素晴らしい姿を示しました。私たちはこうして御言葉を読むことによって、聖化の道筋について教えられるのです。自分は自分の生活をどう変えて行くべきなのかを考えさせられ、そうする中で志を与えられるのです。神は通常そのようにして働かれます。ですから私たちは神から来る志を受けたいと願うなら、聖書のもとに来て、これに聞くことを大切なこととしなければなりません。

そして祈ることもそうです。神は志を与えるだけでなく、それをなすための力も与えてくださいます。みことばを通して神の御心をわきまえ知ったら、あとは自分の力で取り組むではありません。それをなすための力は神が与えてくださいます。ですから神に祈ることが必要になって来ます。神が力をくださることを信じ、神に祈り求めてこそ、

私たちはここに約束されている神の働きに豊かにあずかることができます。

今日の御言葉を通して心に留めたいことは、私の内に救いの働きを始めてくださった神は、その完成の日に向かって今日も働いていてくださるということ。私の人格を無視して、強制的に、ロボットのような仕方で私たちを扱うのではなく、恵み深く私たちの意志に働きかけ、私を説得し、私の内に願いを起こさせるという仕方で働いてくださっているということ。そしてそれを行うための力も与えてくださるということ。私たちの救いのために神がこのように心砕いて働いてくださっているのに、私たちがそのことを知らず、あるいは気にも留めず、いい加減な歩みを続けて良いものでしょうか。私たちはこの恵み深い神の働きを軽んじ、あるいは無視して来た自分を思うなら、今朝そのことを御前で悔い改めたいと思います。それは何たる忘恩、何たる無知蒙昧な歩みであったかを告白し、新しい歩みを願い求めたいと思います。取るに足りない者を見捨てず、今日も変わらず愛と忍耐を持って働き続けていてくださる神の前に恐れおののきなから、「神よ、私は何をしたら良いですか」と、御言葉の内にそれを尋ね求める歩みをして行きたい。その時に神は御言葉を通して志を与え、またそれを行うための力も注いでくださいます。その神の導きを頂いて、私たちは救いの完成に至る道を実に進む者とされ、また私たちをこのように導いてくださる神の恵みと栄光を世に宣べ伝える歩みを御前にささげる者とされて行くのです。